

手づくり資料展を開催しました。  
(6月30日～7月22日)



岡野貞一記念合唱団のうたごえでオープニング  
埴生の宿・赤とんぼ・ふるさとです

2015.7月の  
顕彰碑建立の時  
もすばらしい歌声  
でした。



「かた研究会」を3回おこなったこと  
で、今まで誰も探さなかった資料を探し  
出したので、貴重な資料を展示すること  
ができました。ポイント3つを挙げる。



① かが市川房枝に宛てた手紙を解説  
して初公開した。戦後昭和24年2月  
8日の手紙では、脳いっ血を2回もし  
た76歳のかたが50代の市川に国  
会に出ることを懇願している。この手  
紙は検閲を受けながらも市川の元に  
届いていたのだ。

② かに宛てた実母みねの手紙も鳥取  
県立博物館に残っていて、解説してみ  
ると、自分が書けないので十六才の男  
の子に代筆をたのんだと書いてある。  
もう一点、社会主義者名簿としての企  
救男の記録は活字が潰れていて判読  
しにくい。

③ この上部3つ  
の写真は会場で並べて  
みて初めて、服装から  
同日の写真であること  
がわかった。一番左の  
写真の裏には「大正1  
2年か？」と記してあ  
るが、新聞記事や他の  
記録では大正14年3  
月13日とあるので、  
大正14年であること  
が判明したのである。  
かたさんが洋装をして、  
帽子をかぶっている一  
番輝いていた時期であ  
ると思われる。

資料展の概観

鳥取県内の関連する展示会としては、①2005(平成17)年3月於鳥取市金田元市長邸、②2006(平成18)年於鳥取市高砂屋、③2012(平成24)年於米子市山陰歴史館、④2014(平成26)年於鳥取市わらべ館がある。

米子での展示で県立博物館にかなりよい資料が保管されていることを知り、今回も借用することができた。約50点展示の内、半分は県博のものである。

今回は手作りということで、研究会で発掘した資料や、古い資料を現代語に解説したものも添えたこと、現地を訪問しての写真などを発表できた。

アンケートには、各地で展示してほしいという意見が多く、又、車いすの人でも見れるようにしてほしい等のご意見をいただいた。それを受けて、資料をパネルにのせて、各地の、外に出る機会の少ない高齢者の入所施設に展示してみることが計画する予定である。

メディアとしての新聞取材は2社からで、読売新聞は7月2日(月)に、日本海新聞は7月6日(金)に掲載された。

7月7日に予定していた河野浩美さんのトークが豪雨のため中止になり、河野さんとしてはせめて湯梨浜町訪問だけが得るものであった。

## たつこの交流コーナー

インターネット「たつのかたの会」で検索すると、6月定例たつの市議会の様子がよくわかります。署名は5420人集まったこと、かたの会会員は900人を超えたことなどです。皆さま是非アクセスしてみてください。

豪雨のためトークが中止になった河野浩美さんに2回の寄稿でミニトークをしていただくことができました。

「私がかたに関わった経緯」(上)

鳥取とは全く縁のない私が、なぜ碧川かたの存在を知ったのかをまず書こうと思う。

昭和56年ごろ子育てが一段落した私は、自分の時間を女性史の研究にあてたいと思っていた。石川啄木の妻の節子に興味を持ち、資料を探しながら調べていた。

その頃、千葉市主催の近代文学講座があり、啄木の新しい資料でも教えてもらえるかもと受講した。しかし、その講座では目新しいこともなく気落ちしていたところ、詩人の三木露風の講義でようやく興味深い話を聞くことができた。講義のなかで先生が「露風の母親は波乱に富んだ一生を送った人だよ」と言っかけていつまんで話してくれたのだ。ほんの10分ほどである。私にはその話が、全講座の中で一番白く、心に響いたものだった。

その時、一本の糸が繋がった。それ以前に啄木の日記を読んでいたため、「小樽新聞」の碧川という記者のこと



松崎の和田陣屋跡に立つ河野浩美さん

7月6日

は知っていた。啄木が「小樽日報」の事務長と喧嘩して「樽新の碧川のところへ行く」という場面がとても印象に残っていたからだ。しかし、その碧川という人物の妻である人が、露風の実母とは思いもしなかった。碧川かたという女性をもっと知りたくなり、講義が終ってから、どういう本を読めば「碧川かた」のことがわかるのか質問に行った。そこで、安部宙之介の「三木露風研究」という本を紹介されたのだ。

早速、近くの図書館に行ったが、その本は千葉市にはなく、国立国会図書館からの貸し出しだった。二週間で読めるものではなく、どうしてもその本を購入したくなって奥付にある「木屋書房」という出版社に電話をした。自費出版だったようで、電話口には安部氏ご本人が出られた。このようにして、私の碧川かた調べが始まったのだ。

安部氏から碧川道夫氏を、そこから波及して看護の歴史を研究されていた高橋政子氏や露風研究の第一人者である家森長治郎氏

を紹介してもらえた。皆さんからいただいた著書や資料を読みこんで、もっと知りたいと思う事や疑問に感じることを問い合わせる日々が続いた。数カ月後には、碧川かたの一生がおぼろげながら浮かんできた。

その頃、読売新聞社が女性ヒューマンドキュメンタリーという賞の応募を呼びかけていたので、かたについて調べたことを100枚にまとめて応募したところ、運良く入選し『命一コマ』の題で活字になった。しかし、残念なことに私の筆力不足から、反響は友人からのものだけで、私の碧川かた調べは、中途半端なまま止まっていた。

時は過ぎ、平成17年、三木豊晴氏(三木露風の養子)の講演が鳥取で開催されることを、倉吉に住む友人から連絡を受け、私は鳥取に出かけた。その時、会場で四井幸子さんに声を掛けていただいて知り合うことができた。

千葉市在住

河野浩美  
こうのひろみ

次号に続く。

★次の研究会は 10月27日(土)午後2

時〜4時、場所は米子市立図書館第3研修室です。テーマは碧川企救男についてです。初めての方でもどうぞおいでください。

(東部の方は遠方なので、また東部で企画します。その時においでください。)